

## 想起と忘却の重層性

— 水出幸輝『(災後)の記憶史—メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』—

佐藤彰宣

### 一 「伊勢湾台風はなかった」？

「戦争はなかった」という小松左京の短編作がある。(二)。同作は、本書でも言及されている小松の代表作『日本沈没』(一九七三年)を執筆している最中の一九六八年に発表された。『日本沈没』の執筆動機が先の戦争体験にあることは本書のなかでも指摘されているが、この短編の主題もまた「記憶」の問題である。

いわゆる戦中派として強烈な戦争体験を持つ主人公はある日、彼の周囲の全員が戦争を覚えていないことに気づく。学生時代の旧友をはじめ、家族や会社の同僚、誰に聞いても「そんな戦争はなかった」という。

いくら教科書をめくっても戦争に関する記述は見当たらない。次第に自分の方がまちがっているのではないかと自問するが、それでもやはりあの生々しい戦争体験の記憶は確かに自分のなかにあつて、どうしても譲ることができない。そのうち街頭に立つて「戦争はあった」と必死に訴えるが、誰からも相手にされず、最終的には狂人として扱われる。

そこには日本社会のなかでたった一人しか戦争を覚えていない世界が描かれる。小松は、戦争の「記憶」を必死に語ろうとする主人公の孤立を通して、戦後の繁栄を謳歌し、「戦争はなかった」という日本社会の集合的な忘却を問おうとするのであった。

本書『災後』の「記憶史」のあとがきで、著者は自らの伊勢湾台風の「記憶」をめぐる、まさに「伊勢湾台風はなかった」といえるような体験を綴っている。

「しかし、大学の友人にはこの話題（伊勢湾・台風…引用者）は通じない。高校日本史の教科書に載っていないからだ」と気づいたのはしばらく後のことである。同時に、戦後最悪の震災は教科書に登場し、戦後最悪の台風が取り上げられないことも知った。この落差は何なのか？（二八四頁）。小松が「あの戦争なくして、果して現在の日本が成立しただろうか」と問うたように、筆者は「あの伊勢湾台風なくして、果して「防災の日」が成立しただろうか」と問う。そこに共通する問題意識は、記憶の重層性である。

災害の「記憶」が日本社会のなかでどのように語られ、同時に何が語られないのか。本書は、記憶をめぐる想起と忘却の問題を解き明かそうとする。

記憶というものは決して固定的なものではなく、その時々々の時代状況のなかで特定の要素が想起されると

ともに忘却されることを通じて、共有すべき記憶として構築される。そこで中心的な役割を果たすのが、本書が研究対象としている新聞をはじめとしたメディアである。「八・一五」や「三・一一」のような周年報道を行うメディアによって、共有すべき記憶は焦点化される。その意味で、戦争の記憶も災害の記憶も、メディアと社会との応答関係をもとに生み出される「集合的な記憶」なのである。

しかし戦争の記憶に比して、災害の記憶については、社会学・メディア研究としての研究蓄積はないと本書は指摘する。というのも戦争が過ぎ去った「過去」の対象であるのに対して、災害は現代社会のなかで起こりうる「目の前の課題」であるがゆえに、記憶よりも防災に目が向きやすくなる。そうしたなかで、これまで各時代のなかでさまざまに語られてきた記憶の「重層性」は見逃されてきた。こうした問題意識に基づいて本書は編まれている。

そこで、本書では「災害のメディア史研究」として、

災害の記憶がどのように語られ、何が忘却されたのかを、新聞報道の丹念な検証作業を通して明らかにしている。

## 二 関東大震災の忘却

以下では、各部各章の概要について評者の関心を覚えた箇所を中心に整理したい。

まず第一部では、一九二三年に発生した関東大震災が、一九三〇年から一九六〇年の間に社会でどのように語られ、どう変化したのかを扱っている。

第一章「復興語りの終点／記憶語りの始点」では、関東大震災の復興イベントとしての帝都復興祭を対象に、復興祭の様子やそこでの震災の語られ方について検討している。その際、東京と大阪での新聞報道を比較することによって、復興祭が決して全国的な盛りあがりを見せる「ナショナル・イベント」ではなく、東京内部で完結する「ローカル・イベント」に過ぎなか

った状況を解き明かしている。

一九三〇年に開催された帝都復興祭は、文字通り関東大震災からの「復興」の完了を示すイベントであると同時に、本書の主題である震災の語られ方が「現在形」から「過去形」へと変化する重大な転換点でもあった。そこでの「ナショナル・イベント」を演出するために持ち出される「復興」という大義名分や、地域間での温度差などは、まさに「震災復興」の名の下で開催される二〇二〇年オリンピックの動向を考えるうえでも示唆的である<sup>10)</sup>。

「過去形」となった関東大震災の記憶語りが、戦争と結びつく様子について、第二章「戦時体制と『震災記念日』」では検証されている。復興が完了したとされる一九三〇年代以降、九月一日の「震災記念日」には慰霊祭とともに防火訓練が行われていた。その後、戦時体制が進行するなかで「興亜奉公日」と重ねられ、空襲に備えるための防空訓練に読み替えられていった。しかし敗戦後は一転、「震災記念日」自体の報道がな

なる。

このように震災の記憶は、戦時体制に動員され、敗戦後には戦争の記憶に上書きされていったのである。それは、「戦時体制が関東大震災の記憶を下支えしていた」ことを示している。関東大震災の記憶が忘却されるなかで、それに取って代わる形で浮上したのが、敗戦後における食糧危機の問題と直結した水害・台風であった。

### 三 震災と台風の拮抗

「防災の日」が制定された一九六〇年以降の記憶を検討しているのが第二部である。

第三章「震災記念日」から「防災の日」へ」では忘れられた関東大震災の記憶が「防災の日」の制定を機に意図せざる形で再発見されていく様子が明らかにされている。

一九五九年に発生した伊勢湾台風は、一九九五年の

阪神大震災まで戦後最大の人的被害をもたらした自然災害であった。伊勢湾台風をきっかけに、翌一九六〇年より政府は、国民の防災意識向上を掲げて、毎年「九月一日」を「防災の日」として制定した。しかし、「九月一日」という日付は、奇しくも関東大震災の発生日でもあることから周年報道のなかでは次第に、伊勢湾台風よりも関東大震災の記憶が読み込まれるようになる。それは、敗戦後、新聞報道から姿を消した関東大震災の記憶が、風化を憂う「忘れそうな記憶」として再び語られるはじめることを意味した。さらに「忘れられそうな記憶」として忘却が繰り返されるなかで、次第に「防災の日」には関東大震災を語る形式が定着し、「自明な記憶」となっていく。こうして「防災の日」は地震防災が定式化することで、関東大震災はナショナルな記憶として再発見されたのである。一九六〇年の「防災の日」の制定を転換点に台風語りが後景に退き、地震語りが浮上するという、想起と忘却のメカニズムを鋭く読み解いている。

伊勢湾台風の忘却をめぐる、地域メディアとしての特に『中日新聞』の機能に注目するのが第四章「平凡な『魔の九月二十六日』」である。まず『東京朝日』と『名古屋朝日』の比較より伊勢湾台風があくまでローカル・アジェンダとして認識されていたことを確認している。そのうえで『中日新聞』が読者参加を巻き込みながら地域の記憶を掘り起こす、地域メディア独自の役割を担っていた点を明らかにしている。

興味深いのは本章で言及されている、一九八九年公開のローカルアニメ映画『伊勢湾台風物語』と、二〇一九年より連載が始まった浦沢直樹のマンガ作品『あさドラ!』の対比である。同じ伊勢湾台風を扱った作品でも、『伊勢湾台風物語』があくまで東海地区に限定されたローカルな物語として受容されたのに対して、『あさドラ!』では伊勢湾台風の記憶に東日本大震災後の経緯が投影されている。まさに「災後」の文脈において、伊勢湾台風がナショナルな物語として読み込まれる素地が初めて見出されたのである。

#### 四 社会は地震予知の夢を見る

第三部では、未来の地震への想像力としての地震予知と、集合的な記憶との対比で個人の震災語りが組上に挙げられる。

一九六〇年代以降の地震予知の語られ方に焦点を当てられているのが、第五章「地震大国」と予知の夢」である。「防災の日」が制定された一九六〇年以降、地震予知の夢は『日常の報道』の範囲で注目され始めた。一つ目の転機となったのは、一九六四年の東京オリリンピック開催四カ月前に発生した新潟地震であった。新潟地震を契機に国家事業としての予知研究が開始された。さらに松代群発地震、十勝地震と相次ぐ「非日常」のなかで、「地震予報」や「六九年周期説」などが展開され、新聞紙面でも防災対策の科学知として好意的に報じられた。小松左京の『日本沈没』が大きな注目を集めた一九七三年になると、「オオカミ少年路線」とし

てマス・メディアが地震予知を報道することによって、非日常的な「危機感」が醸成され、防災対策の推進を促した。

地震予知という科学者による専門性の高い科学知は、メディアが理解可能な「夢」として翻訳し社会に伝達された<sup>20</sup>。そのときに、地震予知という未来の夢を語るうえで、召喚されたのが、関東大震災という過去の記憶であった。

続く第六章「地震後派」知識人の震災論では、前章までの集約的な記憶としての災害語りと比較対照しながら、自ら「地震後派」を名乗った清水幾太郎を対象に、個人が持つ震災の記憶を検討している。清水の文筆活動のなかで、関東大震災の記憶がいかに登場するのかを追跡することで、明らかにになったのは戦後になって明確に関東大震災を語る機会が増えていることである。それはすでに先行研究でも示されている通り、戦争を基準とした世代論が注目を集めるなかで、戦争ではなく地震を持ち出すことによる清水自身の差異化

戦略であった。しかし本章の重要な発見は、清水の震災語りが当初こそ個人的な体験のレベルにおいて語られていたのに対して、一九七〇年代以降は前章で扱った地震予知報道などを念頭に置くことによって社会問題として関東大震災の記憶を語るようになったという点にある。社会状況の変化に伴う、個人の記憶の伸縮性がそこには見て取れる。

## 五 新聞というメディアウム

以上のように本書は、関東大震災と伊勢湾台風の記憶研究に留まることなく、歴史社会学やメディア文化論としても刺激的な知見を提示している。ここからは、本書によって触発された評者の知的好奇心を挙げてみたい。ささやかながら本書の議論をさらに豊穣にするための一助になれば幸いである。

本書は問題設定が明確であるとともに、なぜ新聞というメディアを扱うのかという方法論についても綿密

に練られていることもまた特筆すべきである。新聞という対象を扱う利点を明瞭に示すとともに、その限界についても自覚的に言及している。過去の新聞紙面を地道にめくってきた真摯な研究姿勢は、各章ごと毎回提示される研究対象の分析方法の丁寧な解説からも読み取ることができる。

特に終章においてなされる、「風化してはいけない」と形骸化している震災の周年報道が、形骸化する過程で何を削ぎ落してきたのかを見るためにも、通時的な観測が可能な新聞という分析対象を選定したという説明は、歴史社会学として意義深いものである。

そのうえで、新聞報道を支える新聞というメディアウム (medium) 自体の機能という視座を加えることによって、本書が構想する「災害のメディア史」はさらに立体的な議論が可能となる。

新聞報道を精緻に分析している本研究だが、災害の語られ方という形式は、新聞というメディアウムの形態に負うところも大きいように思われる。実際、本書で

は新聞紙面における社説と周年報道の関わりについては言及されているし、第四章ではローカル・メディアとしての『中日新聞』が織りなす「想像の読者共同体」としての機能も示唆されている。これに付け加える形で、本書の意図とはやや外れることを承知しながら評者が提案したいのは、新聞というメディアウム自体の特徴が変化する可能性である。

記憶が時代の変化によって変質するように、新聞の性格もまた社会やメディア環境の変化によって変質する。とりわけラジオやテレビといった放送メディアの登場は、情報伝達における新聞の機能や特性に少なからぬ影響を及ぼしたはずである。新聞しかなかった時代と、テレビが普及した時代においては、人々の新聞との関わり方がおそらく大きく変化している。そのような新聞そのものの変化と、新聞報道における災害の語られ方の変化には何か関係性はあるのだろうか。

もちろん、本書においてもテレビでの過去の震災報道を追跡することは、史的な制約上困難である点は

織り込み済みであり、序論や終章においても言及されている。また可能な限りで、他のメディアにおける震災の語られ方も参照し、新聞での報道とも突き合わせている。

そうしたなかで、各新聞社が他のメディアをどのように意識しながら、災害報道を行っていたのかは、何とか検証できそうな余地もあるのではないだろうか。日本のメディア環境が移り変わるなかで、新聞というメディアの機能がどのように変化していたのか。本書の知見と重ねて議論することによって、「災害のメディア史」としての奥行きもさらに明確になることが期待される。

## 六 その後の「戦争」との関わり

本書の重要な知見の一つに、震災の記憶と戦争の記憶の密接な関係性を示したことがある。終章にもまとめられているが、関東大震災の記憶が戦時体制に動員

されていたこと(第二章)や、小松左京の『日本沈没』の背景にも戦争の記憶が関わっていたこと(第五章)、さらに清水幾太郎も戦争との対比で震災の記憶を意味づけていったこと(第六章)など、折に触れて震災と戦争の関わりが登場している。

そこで気になるのは、戦後における「戦争」である。本書で示されている通り、日本社会では戦後、関東大震災の記憶も「戦争」の終了とともに戦時体制の「動員」から「解放」された。その見立ては非常に説得的である。

一方で国際的に見れば、第二次大戦後も米ソの冷戦構造が厳然と存在し、日本社会も少なからず巻き込まれていた。とりわけ冷戦期においては、キューバ危機をはじめとし、核戦争の危機感が社会的にも一定共有されていた。「戦争」は継続していたともいえる。実際、核戦争のリアリティは、まさに小松左京らによるSFをはじめ、映画やマンガなど当時のポピュラーカルチャーに豊富な題材を提供している<sup>④</sup>。



情報技術との関わりにおいても、アメリカでは第二次大戦中のマンハッタン計画を起点にして、冷戦下での核戦争対策のなかで、指揮系統を守る分散型ネットワークとしてのインターネットが生まれたことはしばしば指摘される。より具体的には、喜多千草によると、一連のコンピュータネットワークの構想は、一九四九年のソ連の原子爆弾実験を契機に考案された巨大本土防空網システム(SAGE)に由来するという<sup>五</sup>。まさに、冷戦下での核爆撃からの「防空」こそが、コンピュータネットワークによる情報システムの構築を促したのである。

だとすれば、災害と戦争、防災と軍備の連想が、冷戦構造のなかでも一定の親和性を保つてもおかしくはないはずである。アジア太平洋戦争下では災害に備えることが空襲に備えるアナロジーとして読み込まれたならば、冷戦下においても災害に備えることが核戦争の危機に備えるというような発想は生じ得なかったのだろうか。もちろん、入念な調査が行われている本研

究のこと、新聞報道においてはこれらに関連する記事はほとんど検出されなかったと推測される。とはいえ、核戦争の危機がリアリティをもった冷戦構造において、震災の「記憶」が「動員」される可能性はあったのかという立論は興味深いように思われる。

というのも、核戦争と震災の記憶という視点に立つことは、地震後派を自称した清水幾太郎の思想史研究としても重要な意味を提供しうるからだ。震災の記憶を戦争の記憶とも関連付けて通時的に検証した本研究の射程でもつてすれば、特に一九八〇年に『諸君』で発表され、大きな反響を呼んだ清水の論稿「核の選択」についても、単なる「右旋回」といった解釈とは違った、新たな読み方も可能になるのではないかと考えられる。

以上、評者の勝手な興味関心をもとに議論してきたが、本書の主題や筆者の意図から外れた「ないものねだり」や理解不足の点もあったかもしれない。いずれにしても、本書が記憶研究、メディア史研究、歴史社

会学においてこれまでにない対象と視点を切り拓く、重要な研究であることは間違いない。

① 小松左京「戦争はなかった」の初出は『文芸』一九六八年八月号、七六八九頁。

② 復興祭に付随して『東京朝日』がメディア・イベントとして展開した「市民公德運動」の動向は興味深い。大規模なイベントの開催において、景観整備や「美化」の名目で行われる社会的弱者に対する排除の問題などは行われていたのだろうか。本章の冒頭でも紹介されている昭和恐慌によつて社会的弱者の存在は際立ってははずであるが、帝都復興祭と市民公德運動の動きがどう関わったのかは都市社会学としても重要な論点になろう。

③ 地震学知報道をめぐる科学知とメディア、社会の関係は、原子力爆弾とも相似形である。中尾麻伊香『核の誘惑―戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現』（勁草書房、二〇一五年）などを参照。

④ 田室都司昭『戦後サブカル年代記―日本人が愛した「終末」と「再生」』青土社、二〇一五年。

⑤ 喜多千草『インターネットの思想史』青土社、二〇〇三年。